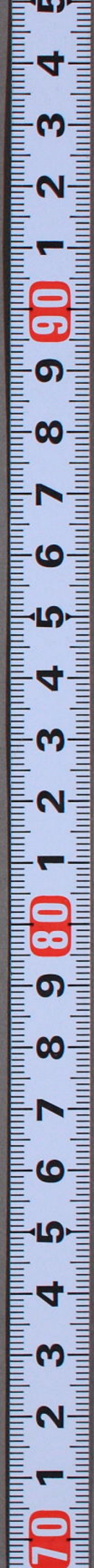




廻船安乗録

特別
ツ4
5207



門 74
0207
小 巻

凡地

凡地乃載るとよの海よる上濶とあし是を
萬里に浪を破る用成利るもの
船あり船なきれと川瀆をも渡るもの
と渡るものも舟車もたの程く
志の河をさや或る陸の車なる
且牛もふ原とむる海に玉るは
船もあらさきと其用をさきり那
船も用多る大なる分志のあれと巨海

皇公安集録

序

昭和二十七年
三月十七日
購求

其深幾らうとらうとるが多き廣大はかたきを
志ら波只一は枯風帆残たの大山の崩る
執なる波浪を志の死其志とと海の地ふ
玉羅んと欲するの海を精煉する
あうとれを魚腹の葬らうと此災害目あふ
阿り況也蛟龍鮪解やとをさ其海世
吞其の人其母んを母を死するをや成り
颯風を起り逆浪天を巻其時と臨ん

死を去る手其飄きこの中を大難
危急得く云るの難波故
其術をゆきのきふはあふとふとふ
あうとらうとらうとるのなる夫八丈島其
日本東南に大洋中ふらうと伊豆國の
地を去る凡一百四十里程其間と他は
島嶼あふとらうと母八丈と南に限るふ
阿り其間と横を渡り急流あふ是を

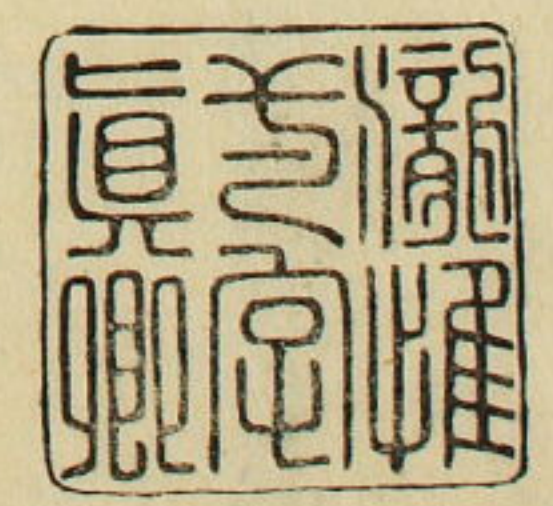
通船尤難と云彼嶋能船長服部義高
 なるもの海船乃海ノ精ニ志を
 通船し能其危難を凌能術を
 曉り能其業を考得志のうらむおのれ
 ひとり此海をゆくを樂す次第
 天下海船成業と云る者をし其危
 難を救む事を教ひし何れ能事

思を心持然く則一書を成しおおよそ
 舟手船業能もの多しと云一丁能又舟
 手も通するもの稀よし假令いさこの
 心も能るおあまも口つゝ傳へ書けり
 筆をさるるか多し義高和漢のいし
 考へよ其子成能其志深し稱を
 予縣令し島嶼の事を兼つゝさるる
 ぬつゝ其始も能きんり成乞予因り不文

故小俚言をめぐりての思ふとよき語を
書くそのおとどと志の事

文化七十九年 年 月

縣令瀧川惟一識



廻船安乗録

惣目

- 一 和漢船の濫觴事
- 一 廻船運漕の事
- 一 神佛へ祈誓の事
- 一 廻船破船の辨
- 一 船乗油咎りて破船と成事
- 一 船主の子扱ひて破船と成事
- 一 入災りて破船の事

一 加減十二支人體に配さる事

一 舟の逆木を用ひる事

一 船造る要法の事

一 元船全圖并傳馬舟の圖式

一 船木善魚撰ひ方の事

一 船の鉄具類の事

一 船の繩類善魚出所の事

一 船の年數保ち方の事

一 船玉神の事

一 船玉神納方の事

一 船方詞の事

一 船中心得二十六條の事

一 船方の者抱入の事

一 船頭心掛の事

一 水主心掛の事

一 四季時候の事

一 天氣日和考への事

一 八潮小汐移り方の事

一 河候考への事

以上

廻船安乗録

東海孤島船長 服部義高著

和漢船之濫觴事

一 夫我朝の船にたるは 伊弉諾尊伊弉

冊尊鳥盤椽樟船を生給ひて 則此船を以て

蛭児を載て流まのま 故ち棄てて 舊事

記し見へ多り此御時始め 舟あり其後

申武帝の御宇筑紫より 船軍を起し

征し 其頃既し 油色船用 成る事と

又其後

崇神帝十七年庚子秋七月

言して曰船天下の要用なり今海内之民

船を造るに苦むと多

しと夫より諸國に令して船を造らし

給ふ其年冬十月始め船船造るに

日本紀より人々天下よりあま秘運漕

船は出来ぬに又唐土より伏羲

氏木を剝りて船を造るに木は火を楫を

作るに楫の利は以て不通を濟し易に

又其外古書に番禺に人始め

船を造るに又黄帝に臣共鼓貨天に二人

舟を造り又顓頊槳舟に帝嚳櫓を造る又

古人落葉の蜘蛛の乗て流水に浮ひて舟

を造るに又魚に翼を以て櫓

を造るに又魚に尾を以て櫓

を造るに又魚に尾を以て櫓

和漢の天下萬民の運漕の爲に

今世益々廣く漕を造るに

心満き廻船運漕と其便利調方
實けらふ神化かんれあるを考へ知しらる
思ふなり

廻船運漕の事

一 舟廻船の運漕要用た多や人力車馬じんりくまれ及ん
ざる如れの幾千里の外あれは多おほき土地
此物を少なき土地ちにおくは海内かいに物有
利り一とてたゞざるものあり運漕うんそうと云
則ち廻船の徳とくありむや相此あれは船を順風じゆんぷう吹

得えるおぬく一日いちにちに百里ひゃくりを走たり又逆風ぎやくふうと
ななふ及んる僅ちりふししく着岸ちやくがんもさき湊みなとを
入いるら又百里戻もどるとあり又風かぜありあひ
せら闘び風もある時ときに一日いちにちに一里いちりも走たるとありと云
百里ひゃくりに海洋かいやうも数す十日じゆっにちを經へて入津いりつと云と何なにも
是則こゝち船業せんぎやうに常つねなり故ゆゑにも不圖ふとの利りあり
船ふね不圖ふとの不利ふりあり船ふねなり是こゝを以もつて人
假えん煉れんの心こゝろも容易よういも一日いちにちに百里ひゃくりを乗のり乗まり
と云いふ利りありんものも幾いく好よまひなるなき

一 氣にあつてまづ人のらびして船を救ひて
 陸にも舟難ふ者船を家にとりて常にもんう
 あり故急ふ毎に功者の仕方をアツク第一
 船の丈夫ふ丈夫を改め第二小道具の善
 悪多少を吟味し第三に荷物に積載
 量に重しおみく四季此時候も應しそその
 土地の風採を考へ日和を見定め諸り我
 胃中も徹する上りて船中熟談の上一交して
 出帆し片時もたつてさうり第一事よんを配る

勿忽とわらびをも守難しして後も及んく大
 小益者あり且諸式賣買物の相場は皆運
 漕よりあつて其價ひをちるし夫れ運の廻船の難
 と多難とにあつて高下を大に遠ひあり其
 難船ある日もある金の荷物を失ふの事あら
 ば二つなき人命を船中一時に滄海に藻屑
 とたつくと歎くなきの甚しき事ありびや
 予幼年より船業にあつて其道よんを盡
 ごと行年既も五十是と東海に船島百里

一 天道神佛の晋々天下の衆生を憂々危難
 を救ひよふと誠々凡言の盡さをなすべし其
 人善哉積道を守り孝を行ひ業銭を乞ふ
 小おろく天のまきふ福ひ哉與々諸願成終
 せむとつふとさへ 故忽小焰火も焼と何々
 たび洪水も漂せとあつとび刀劔も刺とあ
 たらび盗賊も奪ふと何々とび妖怪惡鬼も
 近付とあつとす 蛇蝎も毒とるつと何々
 つび毒龍惡魚も喰ふとあつとす 陰阻高

山も墮すとあつとび 雷震暴雨も物と
 何々とび又其人魚を積道も肖き不孝不直
 むして其業をお誂とつとふとる人おねは
 天是小禍ひ哉與々為業とつと凶なたら
 ざるな 其靈驗凶惡皆人の志をなすなり
 舟中我船業と海とを住居とす 僅々
 板一枚の外に漂々たる海洋もして寔に毫
 釐れも理もたつとび 陸地と遠く進退の働き
 心からざる業もまば實意心路を先して

其本を心忘るも先第一船を丈夫に
造り船具を揃へ船を擇ひ荷物積載
量も修復の年限をのぞき其より神佛に
加護を願ふべきなり然るを其本なる所
に接油ありて難破にあはし河は時
におよんて係る小神佛に立願祈誓を
其寄持育べき道理なり即ち天憎むむ
其寄持育べき道理なり即ち天憎むむ

海神風神を以て暴雨荒浪の災ひを見
ふかろるなり既小海上守護神となす此
住吉太神宮の神記小我の神解あり
以て神解を以て神力なり
我に方便なり智恵を以て方便とす
あや古歌に

心たもまことのみにかゝるひなと
いのらもまことのみにかゝるひなと

又 天照皇太神宮此神記曰日月雖照六合

誠照正直頭とわくのふとくあるまは神の非禮を
 請ふとび其道を正志しして誠意を盡さる
 哉先と船業は能勤めは新たふ神へ立願
 せびとも神明の知むるより万一日和のえ
 遠ひも難破あらんとせむ人力に及ぶ誠を
 盡して手當はなし其よふく神佛へ立
 願せむ豈其加護あらんや滅に天道は人民
 哉守り玉ふとら則ち草木鳥獣の日月はめ
 くみよあつと生長さるると眼あはともまは

恐るるなきりなるは道理をよりく勤辨し
 て先其本を堅固ふして波ふ自己の誠意
 煖煉は盡さる船業もおのつら明らなり
 なるは天氣風候のお表を自然と舍得し
 難破は患ひあふるをのらび

廻船破船の辨

一諸州浦の廻船は滄海の波濤は然とび
 豆板通船はさるるをたのまざる不時の暴風高
 浪よあつたおよんては難破のるら有る後よ

ちあつて天守此異変とて何れもなきもの
 しく吹風もたれまも交りて風とあり雨と
 なり或の夜濤ふゆる除惡石礮等も此の
 事船沈没り或の荷物沈没棹を伐棄擄
 かあつて破船一或の俄に天氣かき
 大風吹起り船沈没沈め或の石案内此地方へ
 船沈入んて巖石も突あて破壞一
 或の湊小艇居中綱類切損し岸へ去
 法多らまき破船とあり或の年数系り

たる船もて津舟入破船一或の荒浪除潮
 ようち合せ板朽た系船と釘鏝保ちつて
 しく破船一或の楫檣痛し其外諸道具
 破亦不足も破船一或の船此の量もつら
 ず荷物積過し破船も如法累年此難
 船沈没の患ひを尋まらるる其教幾とくなる
 事沈志らび既よものあつてなる高家も
 南喜と紀州沖あり舟荷あり此夏遠州
 洋相擄濤も破船あり苗秋の大海も

破船一鈍子の湾にて船を毀ると其商家
 の心痛難言語ふ事なきをるるの比船まきと
 船業のあつらうざる事と如斯に危難を皆
 天災又と時辰到来とのこり目あにえ
 ざるゆゑふ大物此死亡荷主此損亡を未
 なるの成志の比時色程立其難を懼あ
 人のあつらう僅ふ一此難船死亡人救
 ならびふ荷物を一此ふ寄集めく入る時又
 といふある大山城積たたるも量りなう志の

のこららびぬは死亡の靈成海とて吊ひ供
 養さるるもなう一歌くなきふあふもや
 船子油形も破船と成事
 一天氣風作を名遣ひ衆出難風もあひ破
 船一或る湊の出入り破船一或る荷物成捨擲
 を伐或る湊此名漁も拘らぬ暴き居悪風高浪も
 逢所へらけ事て破船一又船中此出火紛
 失物等此ある皆船子此油形あり災ひ此
 元と多くは天氣日和の見遣ひよるも後り

なる是火發へ陸地の大火小類焼とらるゝと
一兩日の天氣を見定め出帆一湊着
を直日此後俄かに大風起り破船とあふ
是と天穿風揺を精心然い進ん切といへを
風あひ潮あひひの進力ら小及とびかく此如
くなまど減意をあら上のとよして天災
とをいふなきたつる

船を十二支人體に配する事

一夫船の造り形を十二支を以て人形を表し

面の方陰よりて龍頭を子丑と云艦の方
は陽よりて物見のあたる柱を午戌頭といふ
又船の名を何丸と名付る船のつら図より
志一郭へなるゆゑ丸とらふ又十二支元圓よ
して其うちより長短規矩を以て恰好をなし
船をなまきゆゑ何丸といふ是則ち船の稱號
なるをわらざる

船を逆本を用ゆる事

一船を逆本を三ヶ所小用ゆる譯は船の陰より

女子の腹をよるたし荷物を積め
 逆木の男の腹をよるたし陽をひき陰陽和合
 此道理なるを夫の逆木一本腰當へ付筒木小
 立和合して其の杖子持とし船玉神を納る
 所なる同一本舳子丑小立す或龍頭も云同
 一本艦の楫小立を足にかけし船を自由に
 廻る所なる故も舳の方杖にさし中此所
 或腹をなす艦の方を尻とし是則ち陰陽人
 辨小配するなり右の方杖押楫といひ左の方を

取楫やふも此譯なる尤船は逆針針と磁針の
 を用ひる時右此理なるなり且是る時の
 針の差方あることなる

船を造る要法此事

一 胴鋪艦継戸立子丑根棚中棚大前上棚大繼
 櫓床通一除棚根船梁中船梁上船梁腰當
 床を塗水入る場所也板のときめ格別念
 入造るを肝要なり且釘鋸をきく
 見たるらしひ目方輕重をあつた免別して念

入仕立おぼろ 若釘鎚の目く 輕目あれ
 保ち方よろろ 一からびきよるよ 上廻りの分胴
 臺垣立棚の矧上ヶ歩 駒の頭立大扣大立
 角の立六本立 知理寄り 外臚建水板字
 向欄子雨覆筋板指板槽梁根太同扣上張
 板筒挟立艦車立傳馬込仕掛合羽扣根太
 同下梁上梁船車立貫拔横山扇立龜の甲
 梁板子丑の銚子飛車下五尺上五尺は莖増成
 惣上廻りよるよ 傳馬船の元船小舟合せお立

一 檣桿傳馬をこの道具と云何まよ具
 合よろ 丈夫お仕立る 最も保ち方木品
 鉄具類并大工の細工もよあなる

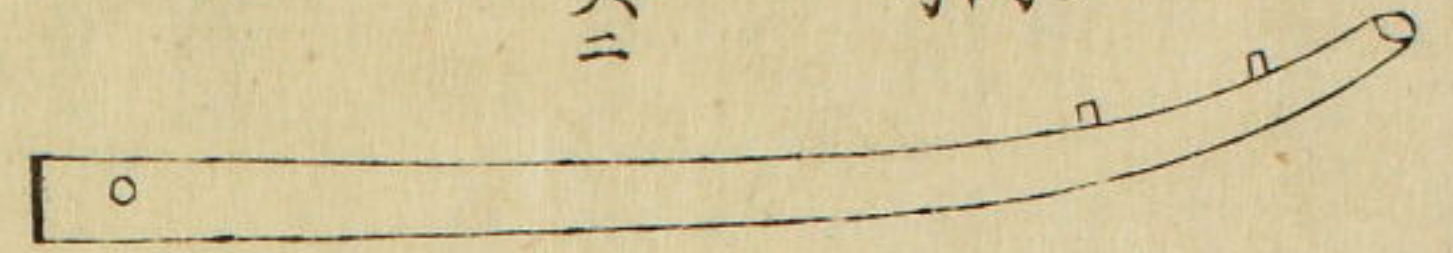
但し 船の全圖一式の縮圖おし 左よ出さるり
 依之引合せの考尤大繪圖の外も別本あり

船木善悪撰方の事

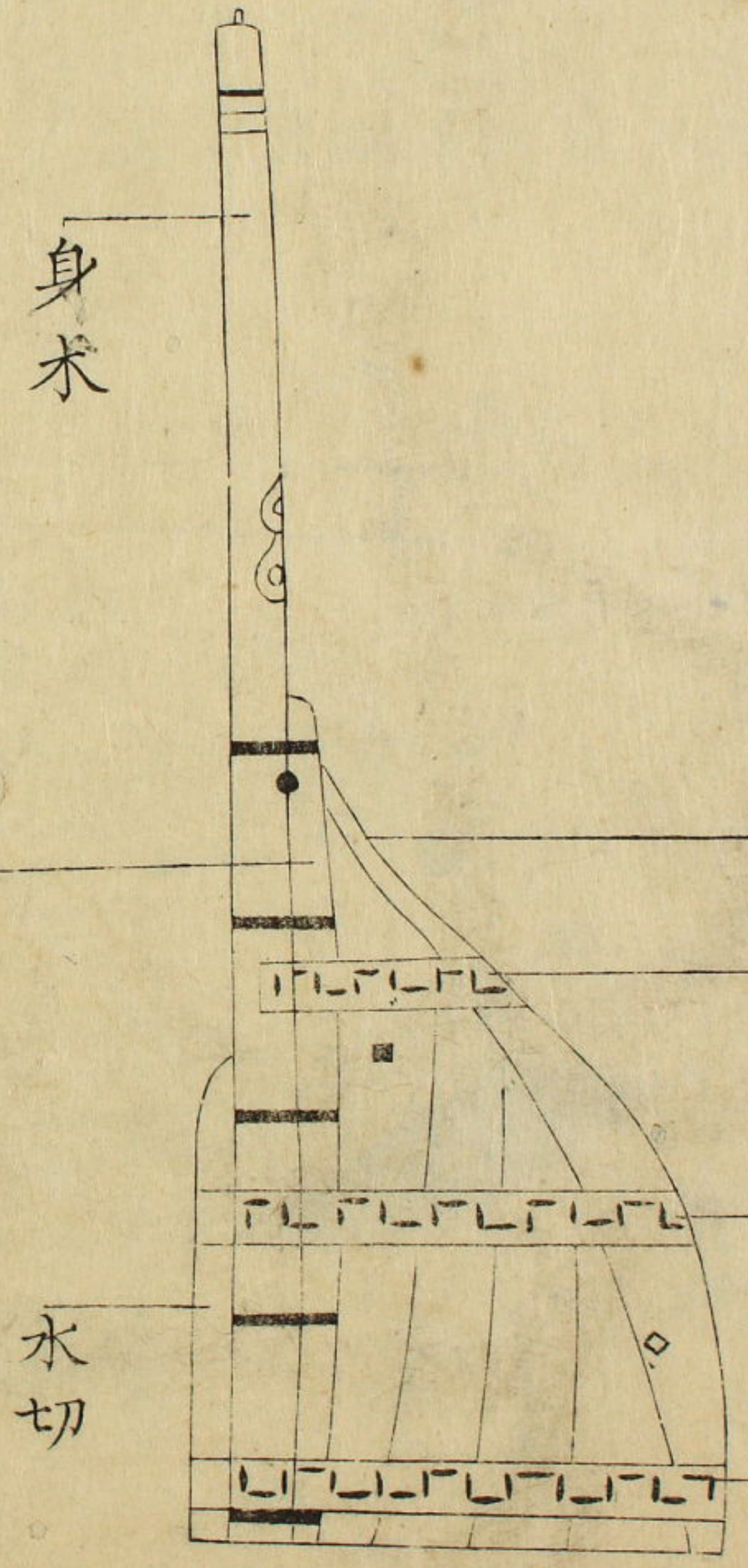
一 船木の第一小伐向を改め次小朽腐り 乾割等
 の木性を念入吟味さるる 本品の杉樟楓檜

元船之楫

限ル 楳^{カキ}木^ハ 楫^{カキ}柄^ハ



楳^{カキ}木^ハ 限^{カキ}ル



身木

添身木

水切

立棧

上棧

中棧

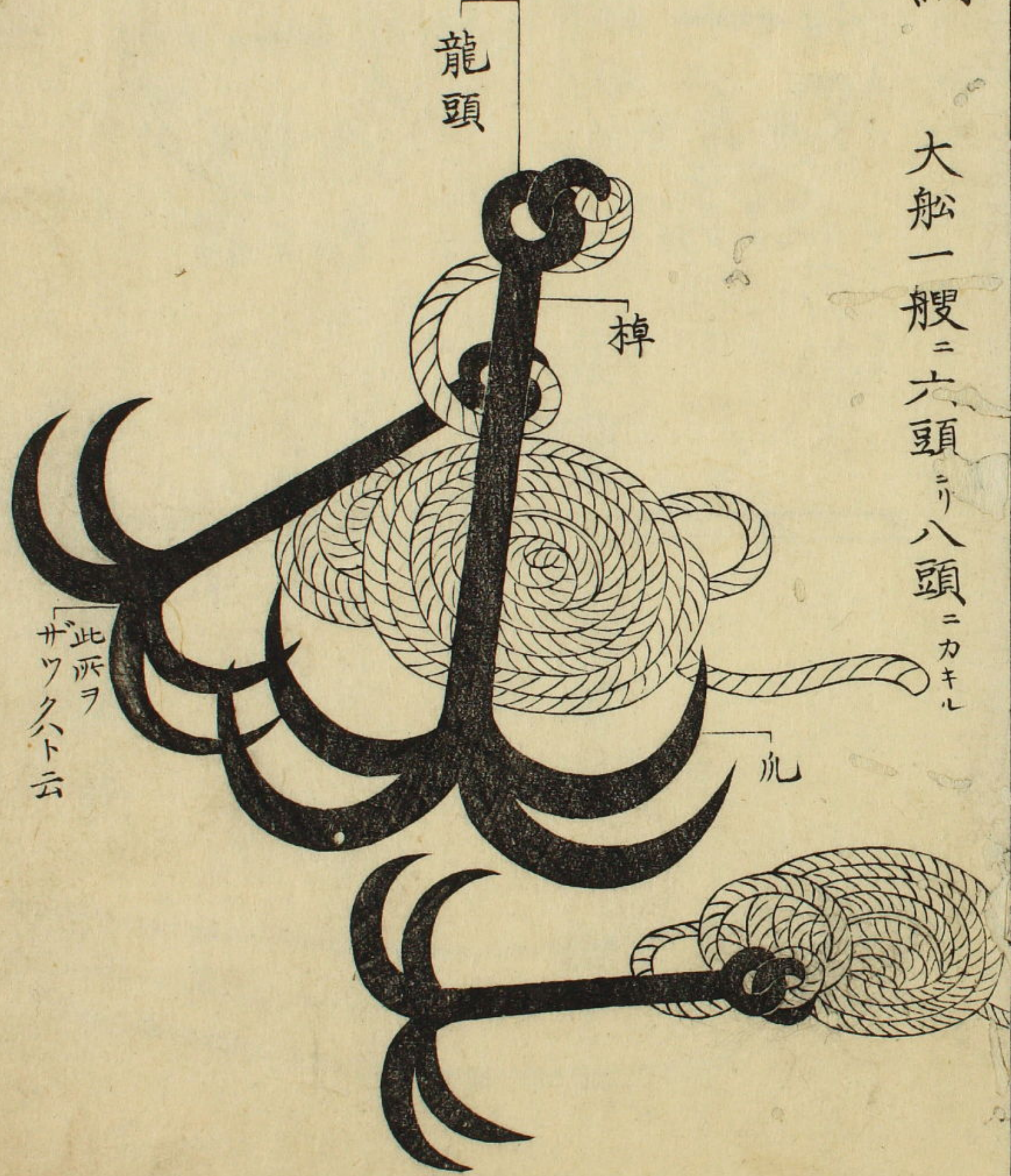
下棧

碇 綱

帆 桁 杉^ニ 限^ル



大船一艘ニ六頭ニリ八頭ニカキル



龍頭

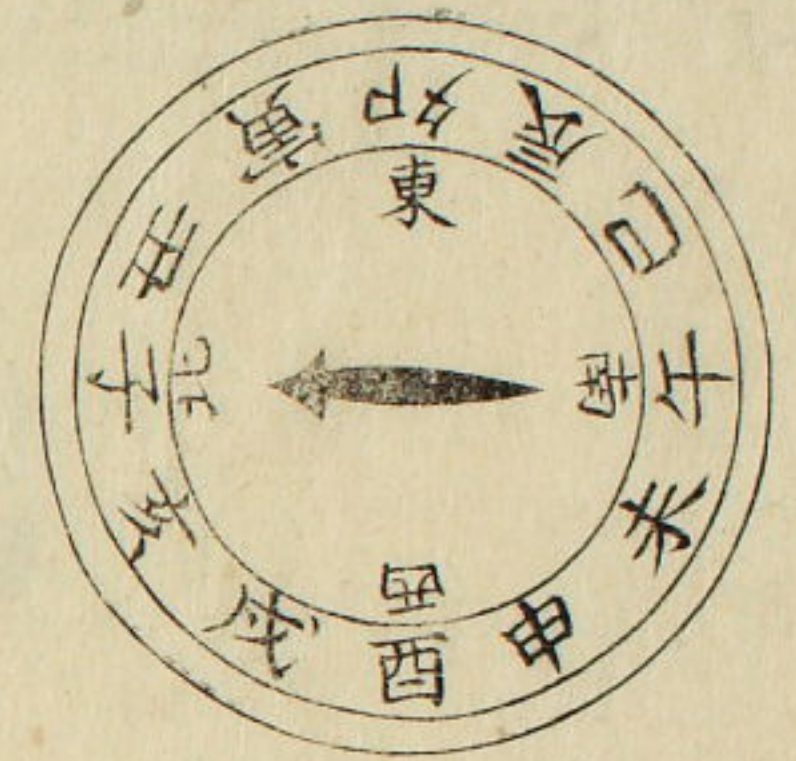
棹

丸

此所ヲ
サツクハト云

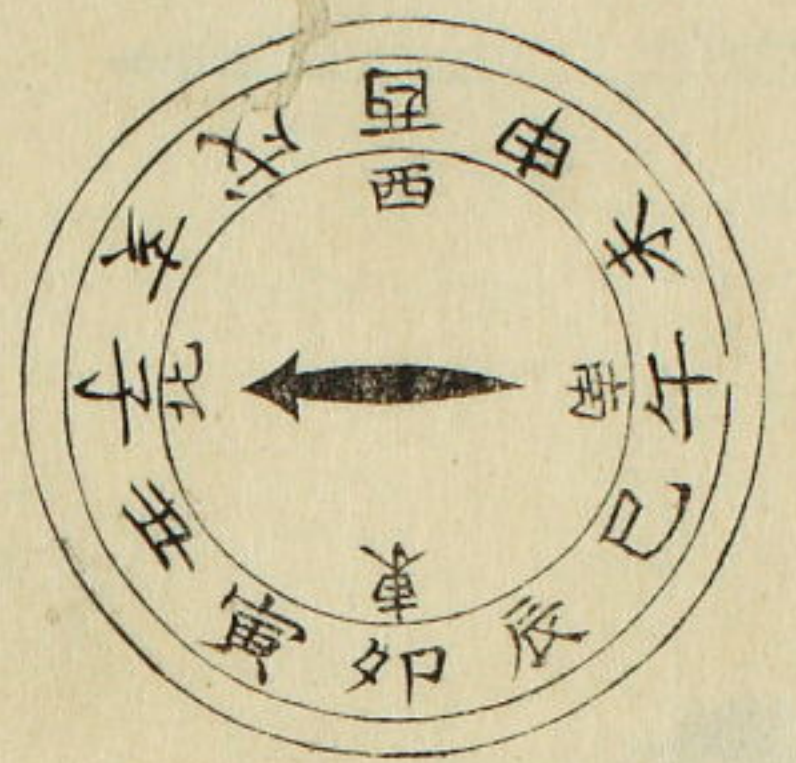
磁針之圖

針本規



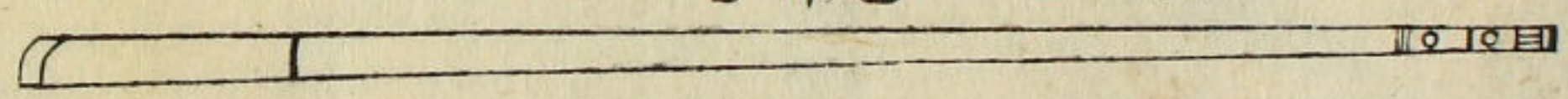
ルツニカヲト

針逆

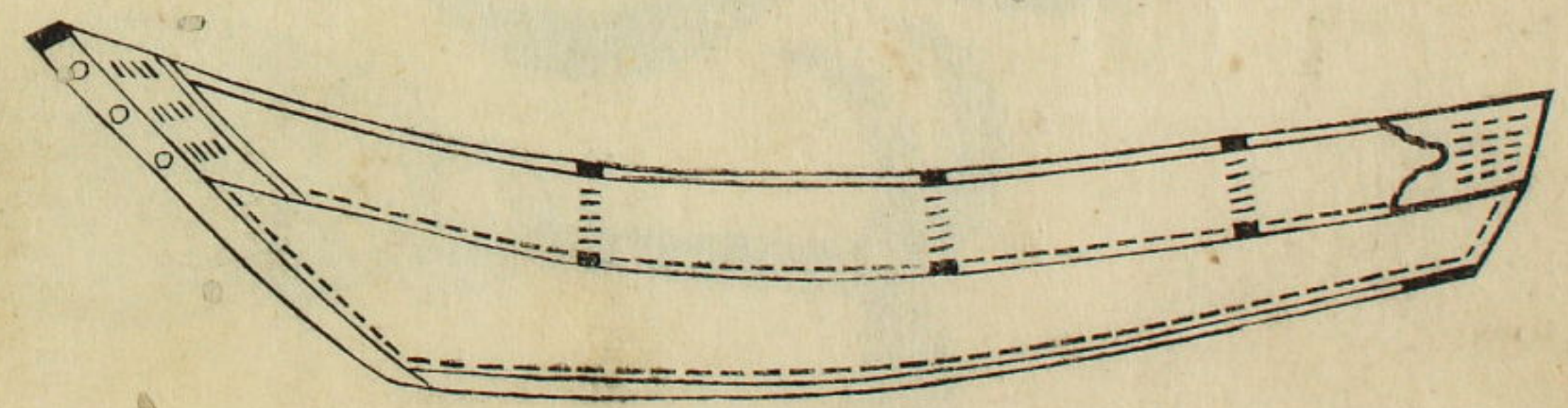


ルツニカヲト

八重帆 橋 用ユ



傳馬舟



檣極是或上木とハ松椀松桂椎是等を下木
とハ杉保ちかこよふハ杉伐旬
ハ秋より冬に中或よとを楠檜と上方筋
杉ハ勢州檜ハ薩摩檜と関東或良材と

船鉄具類の事

一造り通りハ歩釘或平頭らの通釘と云化地
乃釘を落釘と云其外平鋸子遠釘輪鋸歩
釘包ハ釘懸堅免此場所をん歩ハ大夫夫
に仕立巻縄を歩塗留さるるなり傳馬船ハ

櫓權拵へ帆に至るまで用意をなす。若万一
洋中にて元船叶ひば、是れ時此助多船なり。

船の綱類善惡出所の事

一 船に繩綱類は上州芋の摺小強。島田鹿沼芋の
引に法よく、是等を上品とせよ。こき芋は摺
法よく、市皮を引よ。是を下品とせよ。摘摺
繩は水に腐らば、其外檜繩、藁繩、竹繩、藤繩等の
保ち方よ。法よく、是れ因り大風高浪の際に
用ひよ。

船年数保ち方の事

一新造より三ヶ年在中に塗水入れなきものを
いふ。其場所或れ一鑿打さる。船梁は
念入る。とある。六七年過く物鑿を打る。
尤波浦毎に自技なく塗留をなす。十二年
目より他事加へ腐り塗入れ場所強ひ鑿を打
釘銕銕腐を技替らる。志め又増釘を打堅め
牆立上廻り不抄仕直。是を中他事といふ。
十五六年目より別而釘銕銕志免塗留時

改むる一十八九年目を系納めを限るなり

其上を利欲のつらむるに系納めを時をあらは

災ひもあふ基ひたるに且湊なき場所荒濱陸

代揚卸し取扱する船の格別造方丈夫仕立

釘鉸等小至るものも造る太めふいふ一胴鋪

厚く前代通より上品の本を以て造るべき

下品の材木を用ゆる時に取扱ひ小船をなす

痛く出せる船の類は予繩の類はよく造るべき

一六九類ひある場所此船と岸地事あり

一八一年系て湊付代所へ賣渡す事を必要と

するを船入船とありなり年よりその其船を

救むる相人ありゆゑなるは船代買替中地

事を加へ物鑿代打釘鉸を志免六七年を

保ち系納むる一元年陸の取扱ひも

一船船弱る者事なきに利欲のつらむる

年限代系過す時に破損に近きと眼あは

おとかなる何事船と沖合より破損する時に

随ひ成つるきゆ急小湊より随分念入修復

を致すりて肝要と云

一船系納むるき年限ちく乗納め新造を修

に及んく古船改解其中良材此杉檜楓楳

楠榧其品よる古木を用ひらるものあり

且鉄物類の却る古物に能物あり是等大工

棟梁に相談此上用ゆると勘辨あるべき事

なり

船改修立くよる六年此間を新造船と云

此は此間改中修船と云又六年の間を古

舟と云ひ婆丸と云ふ是金と云ふ女と云ふ

如く女は髪へく髪ひ忽かゝいさるなり又和

漱と云ふ船業の男子此業して是等和合の

道理をまへ船法を守ると無理なきや

ん

船王神の事

一船王神の女體めて深位如来也艦は在觀世

音菩薩舳小在の大日如来床小在の不動明王

孟公孟姥とる夫婦神あり又一乃馮耳とる
此神其名を三禮三拜して之夜唱めまひ百忌を
除くを今此清朝にて祭る船神の并とて
女神なり又姥媽とる福建興化の林氏の
娘大海小波して神となりと沙翁を鎮護し
靈驗多し是を天妃と比して天后聖母とる

船王神納石之事

一十二船王神納方の新造出来榮して吉日を撰
ひ船頭船棟梁衣服を改め舟を清浄にして

子持の三筒木の巾を彫船神を納るは是れ船神
入る子は日の船方大に祭禮の如く祝ふとるなり
納方の秘傳あり

船方詞の事

- 一 壺小糸を まこも
- 一 横小糸を よここも
- 一 風よこ糸を かぜよここも
- 一 帆を下糸を ほろこも
- 一 扱て糸を あつかひこも

一先の方より山を見るを

しきやまをいふ

一歌の方より山を見るを

あそやまをいふ

一言浪潮引強き所哉と云ふ切とも案断

ともしふ

一船の中北潮水を

途と いふ

一艫櫓成りあへ引成

おのれらるる

一同く向ふへ出立を

おのれらるる

但し 棹 柁 櫓 同 事 なるを

一同く直進するを

よめ 操るる

こと

船中心得二十三条

一公儀御法度之儀船中より遠く相守

御改め御切手并諸書付類大切なる

船頭取持いたるを

一雇ひ船と成時船の年数積石北高船の道

具の善悪を能見届事諸事おし隠し利

欲めめらるるを心得

一荷物積方の船足を腰當りしをわきりよ法

清むる積荷念入て送状より引合せを遠し
 なきやふ運漕とるを尤運賃取集め
 船頭より船主方へ勘定相立なきなり
 一 積荷物の勿論船具等損せざる指し船中一
 統中念せ汝濡雨濡の用心者一なる尤諸道
 具共損し物損ひ方ありは用立なきあり
 取替且日乾等念入に扱なき指しなり
 一 火此用心別而大切の心掛船中紛失物等あれ
 なきやふなり

一 帆の時の時人繩碇の摺減直一 翌夜油影
 なく塗水を入廻るは相勤む
 なきなり
 一 出帆の時の時呑み飯米塩味噌薪見を貯ふ
 為し糸出しを別而諸を條約を用ひあり
 猶更諸事大切小失墜をなほくるなきなり
 一 便船人者時を洋の遠近船此大小より人数
 を足計らるる人数多き時の却る糸合此
 難儀小相成事なるも若元船破船此若傳馬

小宗助のりすけの禮案れいあん全ぜん試し入い申まをららひ考かんふらり
 一ひと船ふねの日業ひごころより船ふねに諸道具しよたうぐ路ぢひ或あるハ繩綱じゆんがうのすれ
 試し用意よういし萬事ばんじの丈夫ぢゆうぶに仕立しだて置おき且かつ空くう船せん
 の時ときいみ途入あうじんをとと改あらめ若わいし前まへ等とう
 入い用ようの諸しよ書しよ船せんより出でる諸しよ勘かん定ぢやう相さう
 立たたり

一ひと津つ浦うらに潮しほ作しよを考かんへ湊みなと口の淺せん深ふか除けぬ試し
 お月おつき入い津つ出で帆ふに一いつ統とうの試し配はい且かつ意い不ふ

限かぎらば暗あん夜やといへとも出で入いる事ことの速すみハ其その
 地ち理り試しよりくんんははるるががききなるら

一ひと湊みなと入いる其その所ところに控おさをと守まもり其その土地ちの
 の風俗ふうぞく亦また志しのひ道ぢ議ぎ口くち論ろん亦またを別べつ而して性せい
 其その浦うら人ひと何なに事こともし問と合あせ濱はま鳴な潮しほ作しよ試し
 尋たずねの日和ひよりをと且かつ湊みなと船せんの時ときと朝あさ日ひ
 夕ゆふ日ひ此こゝ出で入い試し見み定ぢやうめ船せん中ちゆう寄よ評ひやう議ぎと
 そのままに存ぞん案あんを船頭せんとうへ申まを談だんし其その上うへ船せん
 頭とう親おや仁にと申まを問とい多た熟じやく談だんをなまま

一 波初一己の存ありを以て出さざるの
 らん能其前此中侍るを以て天候時休小
 引合せ考へ評議一変の上より出さざる
 一 沖間より改りあゝ風つゝ
 先又風の度もくばかあらば量理を以て
 して速やふ湊へは事見合せ居る肝要
 とさるる

一 湊内より船多き時をたゞし船の河
 了合せなき船取返さるる且水主の
 船中無人にて毎

一 無益の化出つゝはたからば船中無人にて毎
 難儀となること多し且長逗留する時船
 蛎の付りのちまきば折る措落し空船の
 波ひ立潮虫れ付るやふさるる湊より
 潮水動くる場所より船板を喰ふ虫あるを
 なるも用心あるる

一 水主此者一統存り知ざる國々濊洋をわする時は
 其濊の功者なる船を雇ひ潮候海上の様子
 針筋等委し聞合せ一同を配り糸廻

若又志々系懸へ漂流志たる時は
 成丈風陰へ船成系廻へ岨近へ寄置を承
 の松系成とと考へ國取を尋ひ得其所の
 人よ案内を頼み系出さるる一松系時の掛合
 此火を出さるる一地方近き時又の松もき
 是船宵時たさひし時火を立見さるるなり
 一海上より大魚此類ひ船へ付纏ふ時船中此高
 人影をかく一板を叩き立る一其音よ
 船去より一人中付ふと種此音を拍子木

又の板木板此類音高き物を以て追散すべ
 一海雲あもくも波濤動揺して湧之中大渦
 黒雲あもくも波濤動揺して湧之中大渦
 を中き河事龍糸何の駿と其正解をんてさき
 とも鳴門の如くなると河事其時の船玉の内小
 納置所此女の娘成海中へ投入く災ひをま
 ぬうも由吉人中傳へる加振れを必ひ承るの
 びして竹占もも板子ももおぬる巻せ

急切なり

一海上遙みなる島を遠見せしむ
 小さき島も大きき島も知らず一登れば
 富士山哉遠國より見ゆ如し其高きとて
 登らざれば或は駿河北原吉原よて登る時は
 思ひの外お格別大きき島なり却るる國
 よの島なるよりわをも小島なり是より推量し
 見競べて知るなり
 一沖へ出ると呑水次第不足なる米は

善し強飯より食せざる若水薪は
 ありとも不足なる時の米を剪り挽白してひき
 香煎りたるて食せざる雨降時の油印を
 水に取貯るなりおの大切なるを命に類な
 りと心得るなり且挽白の魚を船中にお手持
 たりしむのたのしみ

但し潮水或はあまのなまきり種々此秘法を書に
 おきても塩氣抜るるなり又潮水を瀧子用
 名石奇器等あまより云傳ふれども是又世に

稀さるものなるを秘し用ふるものなり
 ランヒキとらふものあり試みる小やらの器あり
 濁りたる水のランヒキとて取まらば清浄なるなり
 潮水をきくはあまきる法ありは方々の諸君万人に
 為ふ其法は秘しんとて秘希ふとて秘するなり

一 船中にて火道具失ひ火も尽きて居るに
 磁針にたるもの眼鏡をとりて天火を移し移
 してこれを用ひたり 水晶とてを硝子とてを
 眼鏡とて所持するものなり

一 船中の陸より船へ降りてきて居るものなり
 きのうとたつれとむしよるものなり
 時のかあらば何れも失念物ありとて秘するものなり
 あるものなり

一 遠海を隔て漂流し方角を失ひつるものなり
 國地とも志違はる時を云ふは多しある方角を
 地方近しと知るなり 地方遠く遠く離るる
 雲の雲をみる者あり 火の火をみる者あり
 流したる者ども在島中何方を國地とも

志らまきび拉きとも不節おれ方よそまきく者
ゆゑよ波れ島を出帆し西の方へ向ひて
はまは八丈島へ来着せしとありしを
考へ志らまき

一船中出帆の日より六曜を用ひしより

わたりた通

先勝 吉

友引 半吉

先負 朝吉

佛滅 凶

大安 大吉

赤口 晝吉

右毎月朔日より順よみ此指しそく

一船方一候更ふ志らまき國々島々此除惡難所

へ漂流し糸出しわたり破船とある時

先成丈荷物并船具諸色を取あきしと成

心掛なり且又沖合より強風ふあき船

浦上ふたもちかき時櫓を伐捨濁る

其上より凌ぎかきし荷物と投棄命を助る

とたより船へ萬淋を小皆同意より上子楳

煉の雨も玉もくろ角自己の身を密め人

勝とせびし已る存ぬとせむを要し

もきざ自然と勝利を得むのさうと古人のい
ひしや、船方も其や、船具を堅固より
天氣日和れよ念入精力代盡さぶおのづ
危難をまぬらうる理に當法あり

右二十二箇條と船業安乗に基ひとさる所此
大意あるまの船業に事此理をさるる常
魚使し船法を立一統和熟しと諸事や念
天氣風候れ見方をさるる煇煉をさるるは解
の細事と至つる此二十二條を推量する

考へてさるる

船方者抱へ入の事

一船頭と船中此大将の役たるまことおの
心無船業の仕方と嗜む心志の人辨をた立
し、尤もきざ自然の教へて自然と行届くと
なまきざ船中よける大切の役ありと皆船頭
の差圖ふよるりなり且親仁と船頭に續き
船中此事にあづる也急に和順する人辨は見
立萬事よる付着を抱へる又其悔れ水並

達者よよく働くものを船頭親仁友人よよく
 見立れ上抱へる。兎角船業の場救煇煉
 をなす功を積事代為つとて第一船を夫
 夫よなす第二に道具を備へ第三ふ船子代
 扱へ此三つれもの能調ふ時の海上安乗さるべし
 沖合よ急かす難風ふあふ時の其進退陸の
 戦場よるも難し。意あやもちとあるふ至つ
 は救十人の急命皆死を同のさるる船は此常
 なるも其災ひの耐も至つる便船急命者

いう私ものみゆきをわすれ故ふ船中の急命
 者と睦愛別而船子の親子のよく和順を為
 ら心かゝる

船頭心掛の事

一船頭と船業調煉の勿論正路は船法守り
 水主れ者へ差圖を海と陸地と違ひ出
 帆の時或生死の壞と心得船中熟談を
 日和成念入晝夜油所なく雲り風吹成
 桑洋の遠近を見刻限を針と潮候を

考へ艦綱を解糸出さす或肝要とさるなり
 世子謂る諺に水能船成浮むとさるも
 之能船をさすといふもさるや道理成志系
 乃て扱洋へ糸出さすの磁針北極方角一
 なる風候潮候を考へ臨山先山成きこり先
 針を居るに是る針筋も随ひ是る
 あり山々あり洋の針のいふぬものさる
 居置る煖煉も居る風陰山嵐成見
 各せ是るなりとあり日の入ふ針を改た

むもりのなりを考へるに概制限を以て道法
 成るに針筋を定め糸居る針を案針
 とす是るなり夜に別して大切なり災ひを
 多し扱洋小あり若海洋風西暫時小変化
 て出晴ふたりとあり其時の柱を以てははせ
 又の是るなり利ありならし成引せ扱る利あり
 乗切る利あり或の山々ありと方角を失ふと
 ありと東西南北船の居る知れぬとあり皆船
 方此考へ成以る案時に至つる船中一同

評議して斗ふる若ませふいよく改訂な
らざる時の針筋此直後改考へ一二之を書記
御稜闡成以て神子伺ひ闡此當了成以
る針を定むる如法船中一変成をすを
なきは其時の神慮少を佛意少を叶ひ安
楽を得る一扱海を山を見出の時、玉玉
成目當ふ針筋を定むるを比皆臨機應變
故ふ船法立たまふ船中不取締りなりて
仕換へ多し一扱へ災ひの日和の見く

未熟油に不和より、油の質を慎み、
なま船頭の別して日和の考へる要ありて、
の評議成聞届る國成、改訂をせむるかせふ
さるると少しあはるる

水主心掛の事

一親仁の船頭、小續き船中を用人、萬事に
煉し水主と睦後、諸道具、常々油
なく、おまふ備へる荷物、積指念入、圍ひ方、雨濡
潮ぬき、痛まざるや、心を配るる、湊よめる

時ハ彌破の摺を暮夜ハ世々暴風激浪と云
 諸事ヲシテ望國小繩を増て急而用心を
 且水主ハ船頭親仁の望國を諸怠りなく働
 き煅煉を以て日和を考へ船頭親仁談ト
 評議を以て出帆入津を多しなり若氣隨章
 候ニ面々此等簡いひ暮る時ハあらん災ひハ
 あふと知らなると志氣なり

四季時候の事

一春正月ハ節陽氣をへたさるまじと云

西水の風盛んし二月の節ハ風せら
 ひ石回しし陰風吹きてあり雨後ハ長
 閑となり陽風吹廻し雨降氷は解花開き
 草木芽生ず土用ハ入暖氣漸く生ひ是れ
 春分と云ふ三月の節ハ入氣風を包く東方より
 風吹廻し草木葉色成増是れ穀雨の節と
 云ふ春分と云ふ風此時なり
 一夏四月より風順なり静なり船業のよし
 風の吹雨降暑を成候なり陽の方より風

吹廻ふきまわ一い月げつのさ入い入い梅うめ壬に癸み日にちよよ令れい
 二十にじゅう又また日にち丙へい丁てい小せう晴せい此こゝ入い梅うめの中此こゝ風かぜの石同どう一い
 吹ふ梅つ雨ゆ晴せいの風の東南なんよよ吹ふ廻まわ一い月げつの
 節せつ小せう入い未み日にち照てい至し定てい至し暑しよ氣き法ぽうははれれん
 風かぜ吹ふととああままびび出で用よう入い三さん六ろく八はち日にちのう陰いん陽やう
 の替るるふふぬぬああままの田畑はたけよよ一い出で用よう明めいあありり
 大たい風ふうああままとと氣きをを野の分わけの風ととの東南なんの方
 よよるる吹ふ風かぜ入い梅うめの中此こゝ庚かへ一い風かぜあありり又また月
 中ちゆうの風之の一いくく吹ふの庚一いのうちちをを之の一い

出で用よう明めいああままの外の風静しずかか吹ふてて辰ちん巳みのうちちをを
 村むら雨あまああままびび大たい風ふう此こゝ起おこるるをを志しすす所ところ
 一いっ秋あき七しち月げつの陰氣きをを司つかさととるる七しち月げつ中ちゆうの陽氣きははよよく
 日ひ照て至しななるる東とう南なんの風吹ふ出で一い西せい水すいの方よよるる
 庚かへ一い陰いん陽やうの風せせららひひああままとと二に百ひゃく十じゅう日にち此
 内うち外そとああままとと雲くも山やま成なり纏まとひひ空そら小せう風ふうああままととかかなな
 ららひひ大たい風ふうああままとと七しち月げつ末まつ八はち月げつの中ままととあありり秋あきの古
 用よう小せう入い西せい水すいの方よよるる吹ふ風ふう涼りやう一い天てん氣き不ふ同どう小
 一いってて風ふうああままとと九く月げつの古よよ入い風ふう順じゆんああままととり

静くしゝて船は安んじし
後子風を生じ北を濱西風とす

一冬十月の寒風を催し南の方より風吹く

吾輩もそのうち其後小西の風吹波風荒
く是を冬風起るとし十一月此節より小風吹

霜雪あり十二月の暮より陰のこもり風
多ありて後去用小入る雪甚しく西小

此風多し雪深く氷厚なりて雪
最も強し四季の時候天氣此考へ多年の

煖煉成以て之を習ふ

天氣日和考への事

一元日明方より此は先日輪の光を寅此

刻より小福星雲より地も福星とむなれば

天地和合の順氣を知る

一昨日此日和入り小室を災ひつ月の出入りある

なるも毎月朔日より十五日の間を若月とす
入りあやまらむ十六日より晦日とす
月あつ出るよあやまらむあると志す

煇煉を以て見習はる

一陽分

寅卯辰巳午未
正二三四五六

一日の七つより三つ八つまで
一月の正月此後より六月終まで

一陰分

申酉戌亥子丑
七八九十十一

至七つより夜の八つまで
七月の正月より十二月終まで

是年月日時小陰陽移る由急夫を人合
也天氣を考へて夫陽風の東南より吹
萬物成育ひ喜憂風を包み雨送る葉
花開き草木此芽成生ひ夏に入梅小苗
降葉物成育ひ秋の風露を拂ひ萬物

このころたのむ冬は西より風吹ゆ急葉物傷殺
は霜雪降りて草葉悉く枯

一陽分の風空を吹ゆ急に空は雲行りくく

地上風静くある故小虫中送るありて萬物

を喜ぶ

一陰分の風空を吹ゆ急空の雲り静くありて

地上は風至つくと多し由急小虫中乾き葉

物成枯る

一陽は月辰巳の方より五時の風を生ひ

逆風を生ずる時と志多し

- 一 暮 東風吹時を夜晴成りよすがなるなり
- 一 夏 西風吹時にかあらぬあめぬれ起さるるなり
- 一 秋 南風吹時にかあらず雨のき法あきなり
- 一 冬 小風吹時ふゆかあらず霜せんとつを日ひとるなり
- 一 秋冬 東風吹法あきふゆかあらず風かぜぬれ起さるるなり
- 一 草花 葉はためぬ時はな陰風かげかぜを生ず
- 一 草の 葉乾く時くさ陽風ひがきを生ず
- 一 山 鮮明あざやうなる時やま陽風ひがきに近ちかず

- 一 山やまへへさる時とき陰風かげかぜに近ちかず
- 一 日 暈月暈ひかりなる時とき照ある時とき風かぜを生ず
- 一 雨あめの 脚あしなる時とき陰風かげかぜを生ず
- 一 雨の 脚あしたき時とき陽風ひがきを生ず
- 一 雲 切きる時とき大風たいかぜを生ず
- 一 舟ふねに 雲くもなる時とき大風たいかぜを生ず
- 一 海うみの 潮うしほぬる時とき大風たいかぜを生ず
- 一 船ふねたち 村むらあきぬ時とき大風たいかぜを生ず
- 一 未申ひつしるの 間あひ小風こかぜなる時とき大風たいかぜに近ちかず

一月廿色いろいりばまるとありあめ霖雨あめの季きなり

一室むらに雲くもをたれいぬちかる

一雨あめ此降くだ出いでしふよるえんき天氣あめ然さ定まると左ひだり通とほ

子辰申しよしんの時降出ときふりいひ

霖雨あめたつと

丑巳酉うしの時降出ときふりいひ

出いでて日照ひそく之

寅午戌うまの時降出ときふりいひ

出いでて半晴あうそく之

卯未亥うみの時降出ときふりいひ

雨あめぬらす

一雨あめ初はつるよぬら止やむと又またぬら小近ちかし

一日照頭ひそく頂うへへあらるこころ心こころ魚あしきあ射あるは近ちかし

一刮ひき雲くもの雨あめを生なむ

一うらららの風かぜ生なむ

一赤せき雲くもの月つき移うつるあ火ひ大おほしある

一黄きなるあたらしあ火ひ大おほしある

一炎えん天てんの青あお雲くもの災わざひなし

一三方さんぽうに雲くも立たちあるあ動うごくあ小こ此方こなたの運うんこるあめを必かならず

一あらら大おほ風かぜ生なむ

一壬癸にんみ此日降出このひふりいるあならしあ雨あめ丁てい此日このひあらるあ

一雨あめのあらら晴はるあるあ

一 小の方より雲が来りて、其の後に赤雲立りて、

大風を生じ

一 冬に風が極まりて、空へ吹上りて、其の色黄なるが、

此の吉なること、是なり

一 東の方より震動電りて、風のききなり

一 西の方より震動電りて、日照なり

一 南の方より震動電りて、風のききなり

一 北の方より震動電りて、大風のききなり

但し、震動稲光りて、其のききなり

夏とるなるは、秋と風なるは、冬と風なる

あまのふなり

大潮小汐の事

一 又日よりの小汐口より十日を長汐なり

十二日と小汐あり

一 十三日よりの大潮口より十九日とあり

一 廿日よりの小汐口より廿二日と長汐なり

廿七日そのいふたつ

一 廿八日よる大潮にやいひ日とあり右を汐移り
やいひ日和は時ふやなり蝦煉しく志系乃

潮候考の事

一 南の方よるまきしに潮をとり潮とらふ
其色まきし海澄て魚獲有と志系乃

一 北よるまきし南に汐成昇る汐とらふ汐濁
里黒赤交りやと魚獲なり

一 東よる西に汐其色まきし夜寒し

漁獲なり

一 西よるまきし東に潮其色空をふく海澄
く漁獲あり

右此外種々の潮乃名あり國所よるまきしの
妻いひは潮行風よ逆らふ時浪高し蝦煉
しく志系乃

廻船安来録終

廻船安乗録後編 全一冊

此後編ハ船具名細巻方仕分共遠海漂流中
扱食等凌方且大洋中道法夏冬磁針筋之事
其外前編より書きし事を出ス

大船大繪圖 両面摺一枚

元船の諸道具木品諸式箇所の本字并當時
通用文字を加へて附する一船業より何から
さる事ありしを極見易からしむ

